

賞讃詩と追悼詩

——ヘンリー・ヴォーンの「想い」

森 田 子 孟

ヘンリー・ヴォーン (Henry Vaughan, 1621-95) の三作目の詩集『アスクの白鳥』*Olor Iscanus* (1651) ——以後、本稿では『白鳥』と略記——に収録されている英語の自作詩十七篇のうち、十篇は、既に本誌で前回までに拙訳が終った。本稿は残りの七篇を扱う。

シェイクスピアの少し後輩として現れ、作品を殆ど合作で発表して大成功を収め、「ボーモントとフレッチャー」と併称された二人の劇作家がいる。彼らは晩年のこの大作家と人気の点で張り合ったほどだが、その一人、フレッチャーの戯曲集を賞讃する詩が、前回取り上げた最後の、リズリー氏に借りた外套の詩に、すぐ続く。

一六四七年に公刊されたフレッチャー氏の戯曲集⁽¹⁾ *Upon Mr. Fletchers Playes, published, 1647.*
 について

私はあなたを知らなかったし、参入⁽²⁾してもあなたが才人だと証明する〈詩人〉の〈称号〉⁽⁴⁾を得ようとするのは無理で何か〈郊外の一挿話〉(あなたにとっては恥辱⁽⁵⁾)になつて〈聖誕祭〉の前の〈四旬節〉のように私のを撒き散らすことになるだけだ。

これはあなたを描き出すのではない、究極のところあなたの作品からのそのような残り屑⁽⁸⁾は 自らの長持ちを〈懇請する⁽⁹⁾〉ことだから。

私にはその〈一篇〉にナイト爵の署名をするわけにはいかないし、爵位を

与えて〈詩〉の結末を〈貴族〉で膨らませることも出来ず政治屋のような大きな顔をして、低い名声を〈少しずつ動かし〉一面識もない人の名前の栄光に浴して引き上げたり私が〈請い求める〉あの〈月桂冠〉を辛うじて奮起する

私などが〈切り取って〉

幽かな〈木霊〉を〈詩〉にまで高めたりは出来ないのだ。

私には受け容れてくれる〈衣服〉はないし、構えてもいられない、

〈フラシ天〉や〈ピロード〉のためとは言え才人の

〈郷土〉然として、

それでもこういう〈試練〉は〈慎重しき〉を増進するしあなたの近くの〈ぼろ服〉を何らかの〈畏敬の念〉なら

感動させられよう。

私は信じていた〈偉大なボーモントは亡くなっていた〉あなたの〈寡婦となった〉〈詩神〉は彼の花咲く寝台で

眠っているのだと、

しかし私には、たつぷり〈騙され〉ているので見えるのだ〈機智〉が転生し、彼の〈精神〉はあなたと共にあって

あなたの単独のペンで、生前と死後の二重に優れたものとなり今や再び〈舞台〉を踏むのが。

というわけで我らは解放されたのだ、あの〈分離〉へと引き裂かれて以来この〈国〉を餓えさせてきた機智の不

足から、その点で

あなたの功績甚大なので、我らは推測せざるを得ない機智の最後の〈版〉は目下〈印刷〉中なのだと、

何故ならあなたが〈創造力〉を汲み尽してしまったので

それ以後創作する者はあなたを盗み取るしかないのだ。

しかしあなたには構想があった、だから〈スコットランド

教会〉は尻込みしない

だろうかあのような〈悲劇の〉頭脳が生む〈意匠〉に。

彼らは自分自身は安全だと思うだろうか

あなたの最も忌まわしい方策を知った時。

〈耳連中〉は集ってそれが相応しいと思わないだろうか自分たちの〈教会大会〉の断食と祈りに、あなたの機智を

向こうに廻して。

しかし連中はそのような無益な〈探求〉でも嫌気がささないだろうから

あなたは唯圧倒し、〈おどけ〉て〈回避する〉ただだが、

それであなたの怒り狂った《詩神》が膨れ上って一撃を加えると

それは唯、フィールドやスウォンステイードの追放を求めることになる。

それでもあなたの《名声》のこういう《獲得》⁽³³⁾は 彼らのスコットランドらしい情熱や、《精霊》の《平和》を

悲しませようとして結ばれた《契約》⁽³⁵⁾より長続きする筈でそういう行為が

彼らの邪惡な《目的》⁽³⁶⁾を遂げさせない時は、美名があなたの《保釈金》⁽³⁷⁾となる。

しかし《幸せだ あなたは！》一度もこういう暴風雨には遭わず 我らの空気で

あなたの全盛期でさえ満ちていたのだから、平穩にみえるだけにしても、

陰と安楽を求めるつもりだったあなたの温和な《魂》は折りよく引き上げていった《平和》な《土地》へと、

それで巢籠ったのだ ある《快い》海岸に

その《隠者釣り人》⁽³⁸⁾は、と やがて《海》の中の轟きが彼の釣り糸を包み込み（その嵐がわめき立てないうちに）退いてゆき、彼の状態を波に委ねるのだ。

こうしてあなたは我らを殆ど平和な思いにして亡くなったので 我らは

この一息つく時期⁽³⁹⁾にあなたの最後の美しい《出版物》に出合うのだ、

と 私はそう思うのだが、（もし不必要に《インク》は汚さないものなら

《精選品》⁽⁴⁰⁾もそうだ 《詩神》には）他のものはあなたの引き立て役でしかない、

この、あるいは あの時代は 書くことは出来ても決して出会えないのだ

あなたに何としてでも《匹敵》できるような《才人》には。確かに、ベン⁽⁴¹⁾は生きているに違いない、しかし彼は別に

しよう、それであなたはあらゆる将来の才人たちを元へ戻して、過去と調和させたのだった。

〔M・五四―五五〕

訳注

(1) ここで賞讃されるのは、未印刷だったものが作者たちの原典に拠ってようやく出版された『フランシス・ポーモン

トとジョン・フレッチャー両紳士作の喜劇と悲劇集』

(Comedies and Tragedies written by Francis Beaumont and John Fletcher Gentlemen, Never printed before, And now published by the Authours Original copies. London...1647.) 三・三四篇の戯曲と仮面劇一篇が収録されている。

ヴォーンの本作は、二・六行目が指示するように、この戯曲集出版前に書かれたのではないかと思われ、フレッチャーだけの作品集だとヴォーンが思い違いた説明になろう。五・二行目の「この一息つく時期に」で、この詩は一六四八年四月の「第二次内乱」の始まる前の作であることは殆ど確かで、一六四七年三月四日以前には書かれなかった。その日にこの版の最後の戯曲がロビンソンとモウズリーによって出版登録されているから [Ma・二一五—六]

(2) I knew thee not 一六二五年八月のフレッチャーの死を。ヴォーンは三歳ぐらゐ [Ma・二一六]

(3) nor durst attendance... to wit 私があなたの作品集に収録されるような賞讃詩を書くには値しないと分っている [RA・四九〇]

(4) Verser remonstrative 直前の 'Labell to wit' と同格で「詩で表明することでああなたが才人であると指摘する」 [Ma・同]

これは、次掲のカートライトを記念する詩「二行目」での 'remonstrances' の使い方に照らしても正しいだろう

[RA・同]

remonstrative = exhibitive, demonstrative [M・七〇八]

(5) Suburb-page (scandal to thine) 郊外は伝統的に売春宿が存在し、悪漢共の集る所。この主旨「私が讀える詩は、フレッチャーの作品には郊外の一挿話のような単なる汚点にしかない程不適切なものだ」 [RA・同]

(6) Like Lent before a Christmasse 「不適當に」の意。自分の書くこの「挿話」は、クリスマススの時の御馳走のようなフレッチャーの作品に較べれば、四旬節の時の断食のようなものだ [RA・同]

こういう卑下は、無論、フレッチャーの詩の評価を高めるためのもの [Ma・同]

(7) speaks = expresses (OED speak v 30) [RA・同]

(8) remnants 自分が今書いているこの詩だけでなく、他の作者たちによる賞讃も指す [Ma・同]

(9) Intreat their date = beg for their term of life (OED date sb²4) [RA・同]

(10) dub the Cobby 自らを「ナイト」だと署名することによって [RA・同] この作品に特別な威厳を与える [Ma・同] / 'dub' 「国王が」の肩を剣で叩いてナイトの位を授ける」。

(11) reare = conclusion [M・七〇八]

(12) Nor can I dub... Verse with Lord この二行、

自分の名の前に‘Sir’や‘Lord’を付けてフレッチャーの書物に威を副えることは出来ない、の意【M・a・二一七】

- (13) Nor politically big to *inch* low fame/*Stretch* in the *glories* of a strangers name 二の二行をラドラムは‘inch’が動詞か、形容詞として使われる名詞か判然としないので‘unflatteringly ambiguous’「頭にくる程曖昧だ」として‘to inch’を‘two-inch’と校訂を余儀なくされることになって最も有りそうにない意味——見知らぬ者の名前の栄光の許に私の二インチの低い名声を引き上げること出来ない——を含めた三通りの可能な読みを検討してみせる【R・A・四九〇】が、一読すぐに‘inch’は「徐々に（一インチずつ）動かす」という意の動詞としか受け取れなかった筆者には‘inch’と‘stretch’の目的語が‘low fame’で‘fame’の後に‘and’が隠れているとみる）この二行は極く自然に、マリラの解釈、「私の幽かな名声を幾らかでも増加しよう」と悪賢く熱心に務めるみたいにして、私を知ることさえなかった人の栄光によって得をすることなど出来なかった【M・a・同】に落ちつく。

- (14) And *Clip* those *Boyes* I Court あなたの評判を高めるふりをしながら自分自身のための名声をこっそり盗み取る【M・a・同】。このまともな読みを、せいぜい副次的な意味だと評するラドラムは、この二は次行の‘a faint *Echo* unto *Poetrie*」を指すことからこの適切な文脈はナ

ルキッソスとエーコーの物語であり、‘Clip’はそれ故‘embrace’「抱き締める」(*OED* clip v1) だと言ひ、オウイディウス「変身譚」(iii・三八七—九)「エーコーは…抱き締めたいと希っている首に両腕を投げかけようとして…やってくる」を参照として挙げる【R・A・四九二】

この優れた研究者は、先刻の二行共々この辺りの真意を、何かの先人観による錯覚で読み取れなかったのだ。尚、‘days’は「評判、名声」の意味だが、その前に「月桂冠」である。だから‘clip’「切り取る」が使われる。‘echo’「木霊」(反響)は、フレッチャーの「木霊」である私の今書いているこの賞讃詩を、「詩」の名に値するものにはとても出来ない、と卑下しているわけだ。

- (15) I have not *Clothes* *tadopt* me 「私は自分に相応しい〈衣服〉を持っていない」この譬喩の意味、「作者には人を賞讃してもそれに威厳を与えることになりそうな称号などの名譽がない」【M・a・同】

adopt = stand sponsor for 「名付け親になる」【M・七〇八】／(*OED* adopt v7) の拡大意で‘to christen’「洗礼名を授ける」【R・A・同】

- (16) For *Plush* and *Velvets* sake 従者の慣例のお仕着せに言及。前行の「衣服」の譬喩の延長【M・a・同】

- (17) *Esquire* of wit (本来の意味を譬喩に使って) = aspirant to the knighthood of wit 「機智の騎士道を志す人」【R・A・

同]

- (18) these *Crosses* would improve へんという辛い配慮を和らげる [R・A・同]

Crosses = thwarting circumstances 「意欲を殺がれる」「挫折を強いられる」状況 [M・a・同]

- (19) *Rags* 一三一―四行目の「衣装」*Clothes* 特に六行目の「残り屑」*remnants* の概念と繋がっている [同]

- (20) ボーモントは一六一六年三月六日に死去。

- (21) I did believe...his *favourite bed* ボーモントとフレッチャーの共作は一六〇七―一二年頃のもの [M・a・同]
「寡婦となった」とは、夫婦のような共同作業だったという譬喩。

- (22) *richly* Cosenid = thoroughly deceived [M・a・同] [R・A・同]

- (23) *transmigrates* 死ぬと魂が他の肉体に転生するという例のビュータゴラスの理論へのそれとない言及 [M・a・同]。「ある悲歌」[続小考(四) 20・訳注(6)] 参照。

- (24) *Schemes* 内乱を引き起した分裂 [R・A・同]

- (25) *plots* 一、戯曲の物語の構成、二、陰謀、策略、の掛け言葉 [R・A・同]

一六四〇―四七年ロンドンではスコットランドの長老主義が目立って力を得たことを作者は考えている。「教会」を表すスコットランド語 *kirk* を嘲笑して使用 [M・a・二

一八]

- (26) *strain/At* = scruple at 「ためらう」(OED *Strain* v¹ 21)

清教徒が舞台劇を嫌悪したことへの言及と同時に張り合うともする(同じ句の適用としては相当稀だが) [R・A・同]

- (27) *Tragick brain* 「悲劇の」に皮肉な言葉遊びがある、一、戯曲の悲劇を生産する頭脳、二、「教会」の見地から実際の悲劇を先触れする頭脳 [M・a・同]

- (28) *Designes* 前行の *plots* の同義語 [同]

- (29) *abominable policie* 「スコットランド」教会が採ったのだと当然理解される筈の「忌まわしい方策」をフレッチャーに転移した激しいユーモアを籠めた表現 [R・A・同]

- (30) *Eares* 髪を短く刈って両耳が突き出てみえる装いを流行としていた「円頂党」*'roundhead'* 「清教徒革命時における議会派への蔑称。上級階級が当時長髪だったのに清教徒は短く刈っていたのに由来する」、即ち、清教徒を指す [M・七〇九] [R・A・四九一]

一六三二年に *Histrionastix: A Scourging of Stage Players* を出版する無情な企てをした罰の一部として両耳を切られた強力な清教徒ウィリアム・プリン (William Pryne, 1600-69) への言及もあるか [M・a・同]

- (31) *Synod* 長老派教会での教会裁判所を構成する審判団 [M・a・同]／長老派の集会 (OED *synod* lb) [R・A・同]

- (32) *Field*...*Swansteed* = Nathaniel Field (1587-1633) and Eliard Swanston 共に一七世紀初期の有名な俳優「RA・四九二」／ヴォーンは俳優の William Barstead と混同したか、他、詳述「Ma・二一九」
- (33) *Conquests of thy Bays* = your literary triumphs 「あなたの文学上の勝利」 「Ma・同」
- (34) *Scottish zeale* ヴォーンはスコットランド人をその狂信ぶりとチャールズ一世への一六四六年の裏切り故に嫌悪したようにみえる 「RA・同」
- (35) *Compacts made to grieve...Spirits* おそらく一六三八年のスコットランド契約が受容を強制されたことへの言及であろう (Gardiner, *History of England*, viii, 335-37参照) 「Ma・同」
- (36) *Bayle* [=bail] おそらく 'defence' 「防禦」の意 (OED bail sb³) 「M・七〇九」
 おそらくの可能性としては「保証金」 'security' (OED bail sb¹ 5b) 「RA・同」
- (37) *these storms* 即ち、内乱 「Ma・同」
- (38) *The Hermit-angler* = the solitary angler 「喜ぶ」 「小考(八) 19」の二五行目に「Hermit-wells」 「隠者の井戸」が出ている 「RA・同」
- (39) *This breathing time* 訳注(1)の最後の箇処参照。実際、文学者にとっては「一息つく時期」だった。英国の出

版業での最も興味深い事柄として、一六四五—四七年のパンフレットの洪水に対して一六四七—四八年には、ハンフリー・モウズリーが文芸作品を出版したことが挙げられる 「Ma・二二〇」

- (40) *are but thy foile* = serve only to set you off to advantage 「Ma・同」 ／ = show you to advantage by contrast (OED foil sb¹ 6) 「RA・同」
- (41) *BEN* = Ben Jonson (1572-1637) ヴォーンは、所謂「ベンの子」とは殆ど言えなかったが、その喜劇を賞讃していたことは明白だが、一六四六年と一六五一年の多くの詩が示すように 「RA・同」

前号で扱った四篇同様、この作品も、十音節詩行二行連句の詩型で、五八行から成る。その中に九音節行が二行(ヴォーンが、対象としている作品集が印刷中だろうと推測している二六、二七行目)と十一音節行が一行(全盛期でも政治の嵐に逢わずに「我らの空気」で満たされている幸せだ、と述べる四四行目)が入っている。音節数が例外の詩行は、常に読者の注意を惹く。

続いて、作者自身面識のあった詩人を讃える詩が来る。

片時も忘れられないウィリアム・カートライト氏の

『詩集』と『戯曲集』について⁽¹⁾

Upon the Poems and Plays of the ever
memorable Mr. William Cartwright

私は唯、あなたに逢つていた！⁽²⁾ だから何と虚しいことか
それを《証拠》⁽³⁾立ててあなたを苛立たせても、⁽⁴⁾
尤も流行の事柄が、あの 十二ペンスを払って坐る
人々に《判断さ》せるのだ、才智に拍手すべきかを、
私は心配だ こうしてあなたの近くで《罪を犯す》⁽⁷⁾のでは

ないかと、何故つて《偉大な《聖人》！》⁽⁸⁾

周知のように 真物の美にペンキは不要なのだから。

それでもあなたの立派な《墓石》^(ハイス)に貼りつけられた《標

語》^(ペ)は《大流行》そのもので、《詩》に変えられた涙は

《後世》に教えてやまないだろう 我らの現在の悲嘆と
彼ら自身の損失を、しかも安堵を与えることは決してない、

私は彼らに告げよう 《更に通行証不要の真理なるものを》⁽⁹⁾

カートライトの才智は その《絶頂》期には

《芸術》、《空想》、《言語》であり、あなたに《集中し

て》いる全てだったのだと、⁽¹⁰⁾

あの、古い世界の《書き物》⁽¹¹⁾を至上のものと崇める

偉大な《奇蹟の群》は 尚、その火から護られていたが

それらはこの最悪の時代を賞讃せざるを得なくするからだ。

あなたの比類なき《天才》^(ジニアス)が、あなたの書いたもの全ての

中で、

《太陽》のように、不変の熱と光でもって精巧に働いてい
るので 一行といえど^(ぎょう)（最大の《批判家》⁽¹²⁾になるほどだ）
虚飾や曖昧で気分を損ねるようなものはない。

あなたが 気質の中でも激しいものの跡を辿る時には、

あなたのペンは

人々の中の《まだら服の》地下茎⁽¹⁵⁾を思う様《模写する》が

それはまるであなたが、彼ら全ての胸中に居座つていて

あの 内部に潜んでいる《豹たち》⁽¹⁶⁾を見ていたみたいだ。

恋い慕う《若者》は盗み出すのだ あなたの《宮廷世界の

紙面》^(ページ)から⁽¹⁷⁾

献身を誓う《口説き文句》を、《兵士》は勇敢な激怒を、

それである 表情一つで或る人々は《詩人》に、

人なら誰でも《恋する人》に、変えられる優しい立派な

《読者たち》は、あなたの《奴隸》⁽¹⁸⁾が死にそうにみえるだ

けで、⁽¹⁹⁾

皆が彼の〈哀悼者〉となり、〈眼〉許が溶けるのだ。

こうして、あなたは自らの思想を語りかけるだけでなく

支配し 勢威を振るう 滔滔たる詩で着飾らせたので

それが当然のように引き受けた軀も 暗い〈雲〉

とか分厚い樹皮ではなくて 清潔な、澄明な経帷子なので

それを傍観する人をその〈光線〉は強烈に打って

蘇らせる熱で 彼にブラシをかけて暖めるのだが、

それで〈魂〉が皆〈眼〉で輝きを放ち、〈真珠〉は悉く頭

に示すのだ

ゆつたりした〈水晶の〉流れ一面に一日のひらめきを。

それでもこういう全ては〈国王の〉〈認証〉に較べたら何

だというのか？

あなたは正に〈男の中の男〉、偉大なチャールズがそうだと

と表明された！

だから〈群衆〉には、要なき雑音は控えさせよう、

〈雷鳴〉が語る時、〈爆竹〉と〈風〉は押し黙る。

[M・五五―五六]

訳注

(1) この詩は、他の作者の賞讃詩と共に、Cartwright's Come-

dies, Tragi-Comedies, With other Poems (1651)の中に、
「シルレス族の裔 [silurist] ヘンリー・ヴォーン」の作者
名で収録された。William Cartwright (1611-43) は、学者、
イギリス国教会の牧師、劇作家として、当代大變な著名人
であった。カートライトのこの著作集と『白鳥』は、共に
一六五一年の出版で、カートライト没後八年経っていた。
両書とも有名な出版者ハンフリー・モウズリーによって印
刷されており、前者は一六四八年五月四日に、ヴォーンの
は一六五一年四月二八日に出版登録された [Ma・二二〇
―二二]

(2) I did but see thee カートライトは、ヴォーンがオック
スフォード大学のジーザス・カレッジに在籍中 (一六三八
―四〇)、母校 (一六三二年に学士号、一六三五年に修士
号取得) の同大学クライスト・チャーチで形而上学の教師
をしていたのでその間に出逢っていたであろう [Ma・二
二一]

(3) Remonstrances = demonstrations, or proofs [F・七七],
フレッチャールの作品集についての前掲作訳注 (4) 参照。

(4) how vain it is... 冒頭の二行、逢ったことがあるのを理
由に私などがあなたを賞讃しても迷惑なだけだろう、とい
う卑下によって相手を讃えようとする。

(5) Though things in fashion 哀歌や賞讃詩が、カートライ
トの死後しばらく流行した [Ra・四九二]

- (6) *tuhe-pence* 劇場閉鎖前の芝居小屋の、安い席の料金
[同]
- (7) I fear to *Siime* thus near thee このようにあなたの名と私の名を繋げたりして罪を犯すことになるのではないか
[Ma・二二三]
- (8) *great Saint* カートライトは、牧師としても敬信の念の篤々でも令名が高かった [RA・同]
- (9) which needs no *passee* 自ずから成程と思わせられる
/*passee* = *passport* (OED pass sb¹ 8) [RA・同]
- (10) That wit in...*Convent* in the カートライト作「ジモン・フレッチャー氏の劇詩について」の一節「世界はあら豊かな模範を喪くしてしまった／そこでは〈芸術〉〈言語〉〈機智〉が一全体を支配していたのだが」と比較せよ
[Ma・同]
- (11) The old worlds *Writings* = The classics 「古典」[同]
- (12) the most *Critick* he = the most fault-finding person 「最も粗捜しをする人」(OED critic a2) [RA・四九三]
- (13) *flashes* = superficial brilliances 「上だけの輝き」(OED sb² 4) OED の初出例一六七四年 [同]
即ち、一方は想像力過度の飛躍に対して他方の '*obscure*' は '*dullness*' 「沈んだ鈍々」[Ma・二二三]
- (14) the wild of *humours* = the wilderness of men's dispositions [RA・同]

- 'humours'* は、無論マリラが詳述する [Ma・二二三] 中世の生理学説で言う四大体液（血液、粘液、黒胆汁、黄胆汁）——その割合で人間の体質・氣質が決まると考えられた——を髣髴とさせる。
- (15) *Motley stock* = multifarious personalities 「多種多様な個性の人々」[Ma・同] 穏当な「正解」であろう。/*'motley'* はおそらく様々な種類の人々を模倣してみせるまだら服の道化師やビエロの活動に思い及んでいる [RA・同]
- 'stock'* の訳には、少々冒険かと思わないではなかったが、作者の「意図」も前後の文脈に照らして動植物の「種族」更にはその「原型」へと当然届いていそうなので、筆者の初読、第一感に結局は忠実に、植物の「根茎、地下茎」*Rhizome* (OED stock sb² c) 「但し、その初出例は一八三一年なのだが」の意を採った。単なる譬喩としても面白い。
- (16) *Leopards* = personalities. 個性を持った人間は、豹が斑紋を変えないように、各々の氣質を変えるのに無力であるところから「豹」なのだ。人間の氣質は、意志や外側の状況によつては変え難いという観念は、ルネッサンスの劇作家、特にシェイクスピアも含めた喜劇作家に大いに用いられた [Ma・同]
- 人間の本当の個性は秘められているが洞察力の鋭い観察者から隠されることはあり得ない。「エレミヤ書」13・23 「エチオピア人はその皮膚を、豹はその斑紋を変え得るか」

参照 [R・同]

- (17) thy County page カートライトの、宮廷生活を描いた紙面の表現を唯讀えているだけだろうが、彼の作品 *The Lady Ervant* 『貴婦人の遍歴』(1651) 第二幕一場の女主人公が、自分のお付きを「ひょうきんないたずら者で、まるで宮廷のお小姓そのもの」と評した言葉の反響のようにもみえる [Ma・同]。‘page’の二義「紙面」と「小姓」の掛け言葉とみている。

- (18) thy Slave カートライトの悲劇作品 *The Royal Slave* 『王の奴隸』は、一六三六年八月十日にクライスト・チャーチ・ホールで、丁度来訪中の国王と妃の御前で初演され、ヴォーンがオックスフォード在籍中に二度(一六三九年と四〇年)印刷された [H・四四]

- (19) but seems to dye この作品の最後の場面への言及。ここでは、主人公で身請けを他に頼らない奴隸のクラタンダーが、勇敢に冷静に、火刑に処せられる(その運命から最後の瞬間に超自然の力で救い出されるのだが) 積み薪を直視する [Ma・同]

- (20) a strain = style; tone [Ma・二二四] うちはむしろ「言葉のよびみなが流れ」A stream or flow of impassioned or ungoverned language (OED strain sb² 12 c)

- (21) bodies カートライトが自らの思想を表現するのに用いた多様な文学形式 [R・同] / 譬喩で「表現の形

式」を指す [Ma・同]

- (22) shrouds 二行前の「着飾らせし」‘test’で導入された譬喩とイメージが続いている [Ma・同]

- (23) They brush and warm...a quickening heat ヴォーンの宗教姿勢のように響く一行。「燈石」所収の「鶏鳴」「小考(八) 32-33」の四四-四六行目「私に御身の光でブラシをかけて下さい、私が／申し分のない真昼へと輝くように、／そして私を御身の栄光に満ちた〈眼〉で暖めて下さい！」と比較せよ [R・同]

- (24) Test = おそらく‘attestation’ (OED test sb³ 3) [R・同]

- (25) exprest 多分‘expressly honoured’「はつきり名譽を与えた」の省略だろう [R・同]。しかしそのような省略とみるまでもなくこの行は、‘Thou art the Man, whom great Charles so exprest’だから、‘whom’の先行詞は‘Thou’であり、‘so’は‘Thou art the Man’だと取れば拙訳のようになる。

- 訳注(18)のように、国王夫妻はカートライトの『王の奴隸』を観劇して賛同されており、彼の葬儀の日には国王は喪服で哀悼された [M・七〇九] それをヴォーンは考えている [Ma・同]

- (26) Then let the Crowd...needless humme 国王に認められたのだから何をこの上、大衆である詩人たちがあれこれ賞讃する必要があるか。当時の慣例であつた手ばなしの文

学上の謙遜でもある「Ma・同」

(27) *Thunder* 神々の王であるジュピターを連想させる、それ故、国王の声を指すのに相応しい「RA・同」

この作品も前作と同じ詩型だが、九音節行（豹が出てくる二四行目）と十一音節行（優しい立派な読者たちが現れる二七行目）が、一行ずつ混入する。四二行の作品。

次に、オリンダ夫妻への献呈詩（『続小考』（三）20―21）を挟んで長篇の追悼詩が続く。

一六四八年 ポンテフラクト⁽¹⁾で殺害された

R・ホール氏の死を悼む悲歌

An Elegie on the death of Mr. R. Hall,
Slain at Pontefract, 1648

こうなるだろうとは分っていた！⁽²⁾ だからあなたの偉大な精神を氣遣う私の〈尤もな〉恐れは⁽³⁾ 涙へと〈改善され〉はする。

それでもそれが流れ出るのは 名声への何らかの卑しい不信⁽⁴⁾からではないし、かといってあなたの名誉が

あの冷たい遺骸へと閉じ込められて 悲し気にその同じ⁽⁵⁾〈墓〉に収まるに違いないからでもない 名もない〈隠者〉そのままに。

あれ程低劣な混乱した思考は、⁽⁶⁾〈殺人を犯す〉ことになる、あなたを酷く虐待⁽⁷⁾

しなければすまない連中は あなたの亡骸⁽⁸⁾を嘆き悲しまずに傷つけるのだ。

しかし私は そのように目の霞んだ〈哀悼の人々〉⁽⁸⁾に立ち勝⁽⁹⁾って

あなたの名声を悪評の〈雲〉⁽⁹⁾の悉く上に見出せるし、勝利の光線を放つ〈太陽〉のように

あの闇を抜けて突き進めるのだ 日々の最後へと⁽¹¹⁾。

成程 誠に、公正な〈男らしさ〉には女性の〈眼〉が備わ⁽¹²⁾っており 涙は〈勝利〉の際に美しい⁽¹³⁾、

我らには強度な免疫はないので 悲嘆は我らのあらゆる防禦をすり抜けて 心を傷つける道を見つけ出すだろう、

しかしあなたが倒れた際 染みよりも塩辛い総量⁽¹⁵⁾をあなたの〈殉教〉に加えるもの、

それは そのような惨めな賛成票⁽¹⁶⁾を蔑んで存立するのだ 我らの一団全体⁽¹⁷⁾によってよりあなた一人の価値によって。

それでも　しくしく泣きながらの讃辞が　何にしるこの
悲しい喪失のうちに救いとなれるなら、あるいはあなたが
涙によってここに甦り戻って来れるものなら、私はどうあ
つても

その総量の支払いをするか　我が《眼》をすっかり《使い
尽くす》だろう。

あなたは我らの二重の廢墟を打ち倒した、それであなたの
生涯に

無理やり作られたこの亀裂は　《教会》⁽¹⁸⁾と天幕の双方を揺
るがせたのだ、

他の人生では学習が彼らを《前衛》からこつそりはずし
卑しくも賢そうにその男を《去勢する》ところだが

あなたの勇敢な魂に宿っている　書物に基づく妙技⁽¹⁹⁾が
あなたの熱にとつての光としてのみ役立ったのだ、

こうして　恥さらしにも行動をやめて

ただ用心深い《臆病者》の名を得ただけの者もいる時は
あなたは自らの血で　誉^{ほまれ}ある買物⁽²⁰⁾を狂わせ、

《剣》と《ガウン》⁽²¹⁾の栄光のうちに死んだのだ、
あなたの血はボンフレットを神聖なものにした、そしてこ

の一撃が

（それまでだったら冒瀆だが）今やその《城》を再び《聖
別した》⁽²²⁾のだ。

我らが嘆くのは《ありふれた》勇敢さではなく

百騎が引き受けた十五騎のようなのであり　火と鋼鉄の
暴風雨の中での（城壁内に閉じ込められてはいなかった）
ような雷鳴が彼ら全てを襲ったのだった。

あなたは《羊毛袋》⁽²³⁾兵士ではなかったし、あの、敵に
目くばせするのを《勇氣》⁽²⁴⁾だとする連中ではなかった、

彼らときたら、銃眼に住みつき《マツチ》や《パイプ》で
呼吸を消耗⁽²⁵⁾して、時々死を覗き見るのだから、

いや、罪だった　あなたをこんな連中の数に入れるなんて
唯、（このように釣り合いを取って）⁽²⁷⁾我らの損失は分った

ほうがよい。

公正で開かれた勇敢さが　あなたの盾だったし

あなたの周知の部署は　挑戦する戦場だった。

それでもあなたの中のこういうものを私は《美德》など
とは呼びたくない、

この時代は承知していた筈だ、あなたには全てが備わって
いた。

あなたの精神^{マインド}を第一級の星々のように飾っていたあの

一層豊かな恩寵は 甚だ輝いていたので
それには及べないこのような光と対照すれば
我らに言えるのは唯、これだけだ、あの時期は美しい夜だ
つたのだと。

あなたの《敬神の念》と《学識》が合体して、
しかもやはり《何本もの光線》が一つの光となり、
あなたの《判断》は見事なものだったので 私は断言して
はばからない、

全体《協議》は直ちにあつてもよかつたのであり、《教会
大会》は誤っていると。

しかしこのような事全て 今更何になる！ 《星》には
《日周》運動⁽³⁰⁾のうちに遠方から放り出されて 夜になると
項垂れてみえるものもあるが、それは降りてきて

《西方の》寝台を見つけたのだ などと言つても虚しいの
と同じだ、

尤もあの別世界⁽³¹⁾では、我らが《西》だと《判断する》もの
は《高度》⁽³²⁾であり、新たな瑞々しい《東》だと証明される
のだか。

それで我々のような弱め感覚は、我らに視力を拒むので
肉体は《精神》⁽³⁴⁾が飛び去るのを辿れないのだが

我らには分かっている そのような恩寵はまだあなたの中
に在つて 我らの上を永遠に向かつて羽搏いていると。
その時以来（こうして飛びながら）あなたは甚だ洗練され
ているので

我らには知性^{インテリ}でもつてしかあなたには到れないのだ、
私は⁽³⁵⁾ この暗くて狭い玻璃^{グラス}の中にあつて

あなたの乏しい影が《完成》に向かつて行つて欲しくない、
あなたが もっと誇り高く、もっと熟練⁽³⁶⁾したあなた独自の
血の通う一人の《兵士》にして《聖人》だと読まれるよう
にしたいのだ。

—— 永遠^{とわ}に健やかに、おお 高貴なるパラスよ！
永遠にさらばだ！⁽³⁷⁾

「M・五八—五九」

訳注

(1) 一六四八年秋、議会の包囲攻撃にポンテフラクト（ボン
フレットとも）から王党派が反撃した際に戦死した聖職
者のホール博士のことだとする十分な理由が挙げられてい
る「M・六一」。ポンテフラクトは最終的には一六四九年
三月二三日に降伏した。この町は、イングランド West York-

shire 州東部 Leeds 南東方に在る。リチャード二世（一二六七—一四〇〇）が幽閉の上暗殺されたとされる古城の廃墟がある。

- (2) Just fears...great spirit あなたが大いなる勇気のせいで陥りそうな危険への、十分根拠ある怖れ [R・A・四九四]
- (3) Improvd to = turned into [M・a・二二七]
= increased to [R・A・同]
- (4) distrust 関連した両義「一、‘doubt’疑ふ」二、‘suspicion’嫌疑「証拠なし」で巧妙に使用。ここから六行目末までの三行、即ち、あなたの名前が記憶されるのは疑いないし、あなたの名誉が亡骸と共に埋葬されはしないかという嫌疑もない [M・a・二二八]
- (5) Cell「墓」(詩語)の他、「隠者」が出てくるので「庵」も含意。
- (6) distempers = disordered thinking「混乱した考え方」[M・a・同]／「政治上の騒乱・不穏」の意も暗示。
- (7) they that must...thy dust 即ち「あなたをこのように誤り伝える人々は、あなたの思い出を大いに尊重するということより汚すのだ」。この行の含みは「牧師が実際の戦闘に参加することへの倫理上の節操に疑問を抱く向きがあるかもしれない」[M・a・同]
- (8) dimme Mourners 即ち「心づはぶっ思っているか分らない哀悼者たち」[同]
- (9) Clouds of obloquie おそろくホールの思い出を（公に彼を哀悼しないこと）「曇らせる」人々 [R・A・四九四]
- (10) that darkness 目の霞んだ「哀悼者たち」の誤解がホールの名の上に覆いかける闇 [M・a・同]
- (11) to the last of dayes 一行目からこまでの二二行、ロバート・ランドルフが弟を悼んだ詩からの借用との[G・M]の指摘に言及 [M・七〇九]、その八行を「M・a・二二八」が引用する、「それでもこのように涙が流れるが、君の亡骸がその墓に／篤実な（隠者）然とびったり収まっているからではないし／君の色褪せた骨灰が正當な銘もない／私設の〈墳墓〉の暗い（気候）を覆っているのに／私が心を傷めたからでもない。そのような混乱した思考は／哀れな世俗の考えから流れ出るものであり、目が見えないせいで分らないのだ／明敏な〈精神の人々〉には〈墳墓〉は／〈不滅〉へ到る大きな子宮でしかないことが」(To the Memory of his dear brother Mr Thomas Randolph, 31-8)
- (12) fair Manhood hath a female Eye 男には、男性らしい人でも、適切に泣くことが出来る [M・a・同]／男が泣くのに何ら不適切なことではない [R・A・四九五]
- (13) tears are beauteous in a Victorie 涙は他人の道徳上の勝利によって誘出された時に美しい [M・a・同]
- (14) high-proofe = strongly immune [R・A・同]
- (15) brackish summe = salty quantity (of tears) [同]

- (16) suffrages = tokens of approval [M・a・同] / (OED) suffrage sb)
- (17) our whole bands おそろく、あなたを悼む我々の一団全体 [R・A・同]
- (18) Church ホール氏が牧師だったから。
tent 譬喩で、軍隊 the army を指す [M・a・同]
- (19) bookish feat 牧師としての教養で身につけた戦術・戦略を指すか。
- (20) purchase [of renown] 「泣きぬれるアモレットへ」[続小考 (四) 34] 訳注 (10) = possession 「所有物」。(11) は初めのうち占拠していたポンテフラクトを指すか。
- (21) Gown 聖職者か法曹関係者に当て嵌る [H・六・一] ホールの学者としての地位を指すことも可能 [R・A・同]
- (22) Churchid [GM] の中でハッチンソンが指摘するように、(清教徒の占拠がそれを「冒瀆」した後)「再び神聖にした」[R・A・同] / この箇処の意味、「ホールを殺した一撃は、それ自体は悪ながら、今や彼の死の場所としてその城を神聖にした」[M・a・二・二九]
- (23) such as with fifteen a hundred bore ポンテフラクトでの出撃を描出している一六四八年十月八日の或る手紙には「十六騎の一隊が突撃して敵の百四十騎を敗走させたが：華のある一人、その守備隊の勇敢に活躍した軍人・聖職者ホール博士の死は甚だ嘆かれた」とある [H・六・一]
- (24) Wool-sack souldier 大法官が羊毛詰めの「袋状」座席に鎮座して上院の議長を務めるように「戦闘を見降している兵士」[R・A・同] / 比較的活動しない兵士を見下しての表現 [M・a・同]
- この語は「ヘンリー四世・第一部」第二幕四場一四八行で、フォールスタッフの肥満を指して王子が呼び掛けに使う [R・A・四九六]
- (25) wining at their foes 城壁の銃眼から片眼で敵を覗きみてる [M・a・同]
- (26) consume their breath/On Match or Pipes パイプで煙草を吸う [同]
- (27) thus poiz'd このように (臆病者との) 均衡を保って (OED poize v 2) [R・A・同]
- (28) Yet these in thee...thou hadst all 次のランドルフの「ロウランド・コットン卿…の死を悼む哀歌」の一節と比較せよ、「しかし彼の中のこういうものを私は美德と呼びたくない / が、世の人々は知っているに違いない、彼には全てが備わっていると」[M・a・同]
- (29) Like stars of the first magnitude 光度に従って星を等級分けするブトレマイオスの体系―可視の最も明るい星から裸眼で辛うじてみえるものまでの六等級分類―が念頭に置かれている [M・a・二・二九―三〇]
- (30) Diurnal motions 日周運動。地球の自転で天球が東か

ら西へ一日一回転するようにみえる動き。

- (31) that other world = that part of the world traversed in the other half of the star's circuit [M a・11110]

- (32) Elevation 地平線上のどれかの天体の…高度、もしくは角度で測った高さ (OED elevation 9) [R A・同]

- (33) Though in…West…fresh East この二行、ヴォーン訳ボエーティウス『哲学の慰め』I ii 21-22「あるいは〈西〉に落ち込んだ〈星〉が何故／〈東〉から再び昇るのがみられるのか」[M・七七]を参照 [M a・同] ここまでの五行半は、太陽が夕方沈むのは、朝になって一層輝かしく昇るためだという古代人の詩的な考えの反映 [M a・同]

- (34) And bodies…flight 「鶏鳴」[小考 (八) 32] の三五—六行目「魂は彼の眼以外の眼によって追跡されることがあるだろうか 彼らに飛ぶ翼を与えたせいで」を参照 [R A・同]

- (35) 底本には、この行頭に π が脱落。「それはおそらく印刷者の誤りであろう」[M a・四八]

- [I] will not…Perfections passe この二行の意味、この詩はホールを不適切にしか反映しておらず、彼の真価の「影」しか提供していない [M a・1111]

暗く狭くしかあなた「ホール」を反映しない玻璃「この詩」によって、あなたの「影」でしかないものが影として完成してしまつては困るので、という譬喩表現。

- (36) more high, more quaint = more proudly and skillfully (OED high adv 6 & quaint adv) [R A・四九六]

- (37) —Salve eternum mihi maxime Pulla! Aeternumque vale! ウェルギリウス『アエネーイス』第十一巻 97-98 行。盟友として闘ってくれた若いパラスの葬送の積み薪へ向かつて、アエネアースが投げかける言葉。

同じく十音節詩行二行連句七四行の作品にヴォーンが愛読した古典からの引用句を二行追句として付加して、悲歌を締め括る。この一行半のアエネアースの別れの言葉は、何十行もの重さで、読者の胸に^の圧しかり続けるだろう。ヴォーンは、古典からの引用句の使い方も巧みではないか。再び、先人の著作を話柄にする作品が続く。

わが博学の友、T・パウエル氏⁽¹⁾に、彼の翻訳『マルヴェッツィ⁽²⁾のキリスト教徒政治屋⁽³⁾』についで

To my learned friend, Mr. T. Powell, upon His
Translation of Malvezzi's Christian Politician

感謝です 優れたあなた、これではつきりしたマルヴェッツィが我らの〈幼い頃〉のような言語に⁽⁴⁾された

のが、

そして何の疑いもなく受け入れられるのが⁽⁵⁾

この外国の《政治家》を我らの胸と頭脳に、

あなたが彼への賞讃を拡大して 自らの蓄えから⁽⁶⁾

この《版》によって彼の価値をそれだけ一層高めたのだ。

こうしてあなたの学識ある手によって《混乱》⁽⁷⁾の中で

外国の植物が我らの恩知らずの土壤で繁茂し、

賢者たちは死後、不思議な運命によって

ここで《使節》⁽⁸⁾となつて我らの《国家》に役立とうと願うのだ。

イタリアは今や《評判》の高い《女主人》⁽⁹⁾ではあるが

この《花冠》を楽しみに待つことになる 外国での賞讃を

誇りながら、

何故なら 賢明なマルヴェツツイよ、そなたは以前は

一つの岸の言語内に閉じ込められていて

あの《両極》の近くで舵を取る《星々》同様⁽¹¹⁾

《地球》の一部でしか はつきり見えなかったのだから、

プロヴァンスとナポリは最善で最高だった、

そなたは輝けたのだ あゝの《海岸》だけに限られて

おそらく誰か 賢明で正直でもあると考えられている

《枢機卿》なら訊ねることだろう、そなたの値は幾らだつたのかと。⁽¹³⁾

そこでそなたはローマへと急ぎ旅立たねばならない、そこ

に居続けることになるかも知れないので

新しい衣装を永遠に纏うことにならないうちに、⁽¹⁴⁾

何故つて七つの丘に非常に近いのに、それでもそなたは

ローマの服装を求めてアントワープに來たのだから、⁽¹⁶⁾

しかし一たびここへやつてくれば、そなたは駆け回れそう

《太陽》と同じようによく知られている《風土》ならどこでも、そして年月のように幾とおりもの服装で

各々人の住む《領域》を熟知しようと挑戦できそうだ。

だからやつて來たまえ、当代の稀な《政治屋諸君》⁽¹⁸⁾は、

何か身分のある頭脳の持ち主たち、我らの《風土》にいる

《長老がた》⁽¹⁹⁾は、

ここでその手法を見るがよい、賢明な確固たる国家は

行動は素早く、論争は友好を旨とし、

助言では連帯し、決議では公正に、

成功はほどほどで、《共通の》信頼には忠実なのだ。

それは裂け目を結合し、穏やかな手によって

一国の熱と燃焼を鎮めるもの、

宗教に導かれ、あらゆる〈小冊子〉⁽²⁰⁾にあつては

意匠が甚だ撚り合っているので 天国が行為^{アクト}を確証する、もし以上の一覧表⁽²¹⁾からあなたが自らの舵取りのまま彷徨うなら

振り返つてここでの自分の行動を^{アクション}〈逐一問い質す〉⁽²²⁾ ことだ、
こういうのが真物の〈政治家諸氏〉が目指す〈目標〉であり、
ここでの偉大さは善良さで以つて一つの〈目的〉を達するのだ。

〔M・六〇—六一〕

訳注

- (1) この長年の友人については「続小考 (二) 49」の訳注
(8) 参照。この作品はヴォーンが彼に捧げた五篇の詩の最初のもの。
(2) Vilgilio Malvezzi (1599-1654)、広範な知識欲を示したイタリアはポローニャ出身の人。医学、数学、哲学他さまざまな分野の研究をした後、主に軍事と外交面の探求に従事し、特に後者で名を馳せた。スペインに在住して、フィリップ四世の軍事会議の委員として英国大使など数々の外交使節として活躍した。彼の著作は全て歴史か外交を扱う
〔Ma・一二三三〕

- (3) これは、一六三五年にポローニャで出版されたイタリア語の著書の翻訳、*The Christian-politic Favourite: or A vindication of the politic transactions of Count-duke de S. Lucar*. のことだが、ヴォーンは、一六七三年七月七日付の従弟ジョン・オーブリー宛て書翰「M・六九〇」で、この翻訳の草稿を保管しており、未刊だと述べていて、明らかに刊行されなかったもの「Ma・一二三三—一二三三」〔RA・四九七〕
(4) *language like our Infancie* 幼い頃と同じ純粹で単純な言語「英語」に訳された「Ma・一二三三」これは正しいだろう、これを「国語」(native tongue)に解したら問題が生じる。ヴォーンの母語 (mother-tongue) はウェールズ語だった筈だから「RA・同」
(5) *without suspicion* イタリアは、一六—七世紀のもっと分別のある冷静な英国人の間では、好色な書籍を生み出し、ローマカトリックらしい広い不品行を促進する所として悪名高かった「RA・同」
(6) *store* 豊かな知識の充溢「同」
(7) *Coile* 時代の混乱状態。パウエルはその訳書の一冊『勝ち誇るストア主義』*Stoa Triumphants* (1651)の序文で、その翻訳が、自分の務めである聖職から締め出されていた間の余暇の仕事だと述べている「RA・同」
(8) *Leiguer* (=leiger) = *ambassador*「同」同じ語は、「墮落」小考 (二) 55 の二五行目、「タレイヤー」所収の

「引退」「続小考（一）32」の二五行目「訳注（9）参照」に使われる。

Jedger の異形、¹⁾ 二義の含意 一、所定の場所に永遠に位置を占める書物、二、大使（マルヴェッツィが英国大使を勤めたことを一瞥）[Ma・二三三―三四]

- (9) *Mistis of the Bayes* 詩の領域で最高にある [RA・同]

作者は「訳注（5）」イタリアの生む作品に周知の道德上の不快感（その大半にみられる「肉体性」fleshiness はエリザベス朝人の強力な胃もむかつかせた）は意識しながらも、礼節上、ボッカッチョ、ペトラルカ、ダンテを生んだイタリアが事実上享受し続けている偉大な文芸上の權威を認める [Ma・二三四]

- (10) *Waits on = looks forward to* (二)の訳書とこう「花冠」を「期待して待つ」[同]

- (11) *And like those Stars...seen clear* (二)の二行の意味は、地球の両極を回る星々の軌道は小さいので、その星々の高度は世界の遠方でも見える程に十分ではない [同]

- (12) *Provence and Naples* イタリア語が通じる地方だった [RA・四九七]

- (13) *price = worth* 「価値」[RA・四九八]

枢機卿云々は、カトリック教の本拠であるローマへの蔑視で、カトリックのローマはこの作品に示されているよう

な正直で賢明な諸原理にまともな関心を抱かなかった、という含意 [Ma・二三四]

- (14) *Er thou shouldst have new clothes eternally* 即ち、翻訳されないままになる [RA・同]

- (15) *the seav'n hills* ローマ、七つの丘の上に建つ都市なので [Ma・同]

- (16) *Thou canst to Antwerp for thy Roman dresse* ムリラは、アントワープは何の関わりもないので誤りだろうと述べる [Ma・同] が、マルヴェッツィの本は一六三五年にボローニャで、一六四一年にはアントワープで出版された [M・七〇九] / 同書のラテン語訳は一六四一年にアムステルダムで刊行された [F・八四]

- (17) *But now...as the Sun* (二)の二行の主旨は、ラテン語と英語は共に広く知られている言語だから [RA・同]

- (18) *rare Politicians...our Clime* 道德を守ると共に有能であるという政治家の資格が、当時の英国には稀だとヴォーンなら感じて当然だった [RA・同]「だから『政治家』Politician「私利、党利を追求する人」という否定の含みで使われる語であるが、四行目のマルヴェッツィを指すのは外国の〈政治家〉Statesman「先見の明があり、無私の心で国政に当る人」という含みの語が使われていて（四二行目の「真物の」が付くのも同じ）ヴォーンはさり気なく語彙を正確に使い分けている。ここでの「稀な」は無論

大いなる皮肉で、稀どころか当今の「政治屋」ばかりという意。尚、英語の複数形の訳出には常に難渋するが、拙訳では、政治屋には「諸君」——「連中」とまで貶めては品位に関わろう——政治家には「諸氏」としておいた

マリラはさすがで、「稀な」「二、素晴しく優れている、二、数が少ない」は二重の意味で皮肉に使用されていると思う、と言う【Ma・二三四】

- (19) Elders 立法・行政機関の構成員で、伝統上年令故に尊敬に値すると考えられている。著者の友人たちなら無論議会政府へのこの遠回しな言及に冷笑を感じ取ったであろう【Ma・二三四—五】

- (20) Tract = manner of proceeding; course of action 「手続きのやり方、行動の行程・経過」【Ma・二三五】とマリラは解するが、ここは文字通りに宗教や政治問題に関する「小論文、小冊子」と取っておく、話柄は政治の論著であるし。

- (21) lists = boundaries; limits 「境界、限度」【Ma・同】／
= limits (OED list sb's 8) 「まるで謙遜があらゆる絆だったみたいだ、人々に羽目をはずさない」「を羅針盤内に抱えておく」(holdeth in compass) 境界(list) みたいに」(一九九二年 OED に引用)【RA・四九八】。もう一例挙げておこう、「Confine yourself but in a patient list.」(一寸御辛抱願います)(シェイクスピア「オセロー」IV・七六)。

しかしやはり二行前の「小冊子」のイメージ続きで、しかも賢明な国家の姿を三一行目以降降らずに挙げているので「一覧表」と拙訳する。

- (22) Catechise = examine carefully 「conscientiously」 「注意深く、良心的に吟味・検討する」【Ma・同】【RA・同】

- (23) Come then...hath one End 第二詩節(二九行目から最後まで) 作者の、議会派議員(チャールズ王に反対した)への典型的な蔑視を示したものの。最終行の「善良さ」と「偉大さ」(greatness, goodness)は「時の」水準とは正反対のもの、という示唆は、当時の急速に進んでゆく共和制の理想に王党派の面々が下す判断の、一種の手垢のついた常套であり、ヴォーンには既に各所にみられるし、他にも珍しくない「挙例の多くはマリラを参照」。特にフェルサム次の観察は注目に値する。「この弛緩した時代では善良なことは不幸になることであり、善良さの価値を意識しても、あらゆる意気阻喪させられる事態には何の効き目もないのだ」(“To the...Lady Dorothy Crane”)／「善良であることは今や軽蔑される甚だしい近道だと考えられている。昔の人々が讃えたものを我々は嘲笑する。善良で正直な人は愚か者なのだ」(Resolves, “Of Reputation: or, a Good Name”)【Ma・二三五】

友人の訳書を讀える十音節詩行二行連句の四二行で、作

者は、同時代の世情・政情への厳しい批判を諷刺の衣に包みながら展開しつつ、政治の理想像を流れるように提示してみせる。「翻訳」を、衣装を替えることだという譬喩が巧妙であろう。

イタリア語の原著を「歪訳」(‘translated’ [M・六九〇])ではない「忠実な英訳」に着せ替えたパウエルには、まるで双生児?のような友人がいた。ヴォーンも親しかったその人物への献呈詩が、すぐ続く。短いが充実した美しい、八音節詩行二行連句二四行の次の作品である。

立派な我が友 T・ルイス師へ⁽¹⁾

To my worthy friend Master T. Lewes

友よ 見えないだろうか 何とまあ深い雪が⁽²⁾
我らが〈地方〉の鬱蒼たる樹木の頂を⁽³⁾〈糖衣で覆つ〉てい
ることか?

その 実の成る枝は 彼の重荷に殆ど耐えられないでいる、
雪と凍った涙に圧迫されて、
他方 物言わぬ川々は ゆっくり流れてゆく、
すっかり〈氷の〉〈外套〉に包まれて。

会おうよ だから! そしてこの世が⁽⁴⁾

酷い〈常軌外れ〉に今投げ込まれているとなれば
ぼくらは自然に倣⁽⁵⁾つてその同じ〈鍵〉を維持して
歩いて行こう ぼくらの先祖のやり方で、

何故これ以上 ぼくらは〈眼〉を向けるのか

近くにあるものにでなく やって来そうなものに?

何故 恐怖とか希望で苦しんで

ぼくらの〈星占い〉も及ばない心配をするのか?

未来を洞察するような者は⁽⁷⁾

しばしばここで定められている期間の彼方を見やって

あの場所には入ってゆけないのだ

その境界を定めている〈教会構内〉を通らずには、

悲しみと溜め息と探索が費されて

ぼくらの奥底を終りへと導いてゆく、⁽⁸⁾

しかし控え目な〈喜び〉は賃貸借期間を引き伸ばす⁽⁹⁾

さもないと生命は病氣になったであろう、

だからこの時代〈哀悼者〉になる者は

涙を流して唯、自分の敵を慰めるのだ。

訳注

(1) Thomas Lewis, フランフィガン (Llanfagan) の教会主管者で、ヴォーンの住むニュートンの近くの住人。「宣伝条例」『The Propagation Act』が通過する前にブレコン追放委員会によって免職になった。彼と前作で扱われたカントレフの教会主管者トマス・パウエルは、同じ地方からオックスフォードへ出向いたのも同じ十八歳の時、カレッジ入學も同日、ブレコンシャーでの就職も同年なら共に一六五〇年に例の条例で免職になるなど、生涯が奇妙なまでに平行していた「H・一一〇—一、一一六—一〇」。ニュートンとフランフィガンを分け隔てるアスク川が凍りつく間、二人が逢うのは容易になったことだろう「H・八」

(2) Sees not my friend..frozen tears 冒頭からの四行、ホラーティウス『頌歌』(Odes I. ix. 1-4, 13-14) に基づいている。「見えるか 君、ソーラクテが雪の外套を纏ってきらめき輝く姿を、抵抗激しい森が自らに掛かる重荷をもはや支えず、水の流れが嘔むような寒気に凍てつく様を…問うのはやめよ 明日はどうなるかを、そして「運命」が与える一日一日を利益と見なそう」(Loeb 版拙訳)「M・七〇九」

我々には幸いなことに、ホラーティウスのこの作品全四巻には、誠に美しい労作の全訳がある。藤井昇訳『歌章』(現代思想社、一九八四年第二刷)、その当該箇所訳「見

るや、深雪も白くソーラクテの山そびえ、はや森の樹々は葉の重荷に苦しむことなく、河もきびしき氷に流るるをやるすがたを。…明日は如何になりゆくらむとたずぬるをやめよ。「運命」の与えむその日をいかなりとも利得となしつ…」

…Ice Coat 更に六行目まで、カルーの「泉」(Cave, “The Spring”) の次と比較のこと。「冬が去ってしまつと大地は纏っていた雪白の／長衣を失った、そして今ほもはや霜も／草を糖衣で覆わず、氷のクリームを投げかけない／銀色の湖にも水晶の流れにも」。この心象の源が何であれ、この冒頭部は象徴に満ち、この詩の中で非常に重要だ「M・二三六—三七」

(3) Canties = incrusts, as with sugar (OED) 「R・四九八」

(4) this world/In wild Excentrics now is hurld 当時の政治の騒動への言及で、作者はそれを、ルネッサンス期の考えだが、人類の墮落が、元来調和の取れた、万象の世界にもたらした宇宙の不協和の象徴だと見ている。神の不興を買って、地軸が中心から外れてその「変革」のせいで世界はそれ以降「酷い常軌外れ(＝奇矯状態)」に陥ったのだと「M・二三七」

(5) nature 文脈から明白なように、森羅万象を結合しその各部分の間の秩序を維持している特定の宇宙の力、という

ルネッサンスに共通の（古典から継承した）観念を反映して使用されている語。この概念は、当時の宗教思想の大半の基礎になっている【同】

- (6) *Horoscope* 天球図・十二球図を操っての星占い、占星術。

- (7) Who into future times...them bounds この四行、ハーバートの「免責」"The Discharge"【五行詩十一連計五五行の作品、W・L・五〇二―一六】の三七―四〇行目「将来の機会を知って／あの場所へと希う者は／その境界を定めている／教会構内を通らずには行けないのだ」からの句。この三九―四〇行目は、ヴォーンの一七―一八行目と全く同じ。尚、その一一―一六行目はハーバートの詩の思想を踏襲している【M・七〇九】

- (8) And draw our bottom to an end 「砂時計」(hour-glass)の姿で、砂の通過を加速することで命を短くするという考え【M・二三八】。しかしこの一行は、前記ハーバートの詩の四五行目(theが'our'になっているだけ)そのままである。

【H・八一】と【M・七一〇】は、'bottom'を'skein of thread'「糸のむれ」(OED bottom 15)と解するが、それが正しい【R・A・四九九】

bottom = fundamental being, or essence 「根本的な存在、精髓」(OED)【F・八五】

- (9) But discreet Joves lengthen the lease ダンの「悲歌」十五「諫言」の「そしてその喜びのうちに我が生涯の賃貸借期間の／短い日々が延びる」(Donne, *Elegy* xv: "The Expostulation" 56-7)と比較のよう【M・e・一三三八】

友人二人への献呈詩に、当代の現状へのやむにやまれぬ思いを托したヴォーンは次に、フィリップ夫人への献呈詩一篇（「続小考」(三) 22-23）を挟んで、理不尽な時代の不運に巻き込まれた王女への哀悼歌を続ける。

故王の次女エリザベス姫への追悼詩

An Epitaph upon the Lady Elizabeth,

Second Daughter to his late Majestie

〈若さ〉、〈美〉、〈貞節〉、〈無垢〉

天国の王族の、選り抜きの〈犠牲〉が、

〈乙女の涙〉と、神聖な溜息と共に、

ここに鎮座する この礼拝堂の〈守護の神々〉として、⁽³⁾

そこでは今 〈御身の麗しい魂が天翔っていた〉⁽⁴⁾

彼らが 彼女が横たわった〈宝石匣〉⁽⁵⁾を護っている。

あなたは、光を見られないうちに⁽⁶⁾

悲しみを 積み重ねて自らのために蓄えてきたのだ、
あなたは災難を吸い込み⁽⁷⁾、乳房が 各々の

《乳》をあなたに与えたが 悲しみになるばかりだった、
あなたのここでの定めは悲嘆だったし、あなたの年月が
蒸溜したのは他でもない 雨ではなくて涙だった、
涙は音を立てなかったが⁽⁸⁾（分つてみると）

如何なる血にも勝るとも劣らずどくどくと疳高かった、
あなたは《雪》の中で生れた《薔薇の芽》のようにみえる
意図のある花で 跳ね上ってお辞儀をしたのだった
頭のない嵐と、《芳香を放つ》て

暴風雨めく《時代》の怒りとに。

他のものなら 自らの難儀が募らないうちに
機が熟して⁽¹⁰⁾ その暴風に慣らされるのだが、

あなたのは、《リユーマチ》が最も虚弱な部分にのよう⁽¹¹⁾
若くて障害の及ばない心臓に襲いかかったのだ。

それでも《芳香樹》⁽¹²⁾がああ⁽¹³⁾引き裂きに来る

者たちのために涙を優しく費すように

あなたは温厚で敬虔だとみられたのだ、

尤も《苦難》に満ちながらも憂鬱からは免かれた

あなたは ぶつぶつ不平も洩らさず罵りもせずに
自分の《ヨモギ》を飲んだのだった 微笑みながら。

嫉妬深い《眼》が声を張り上げ《力を揮って》⁽¹⁴⁾
不運を一瞥で引き起すように

あなたの悲しい星々は あなたに分け与えたのだ
《星の力》⁽¹⁶⁾ではなく《惨事》を、

彼らがあなたを見たのは《蝕の最中^{さなか}の》⁽¹⁷⁾光線によってであ
り 明るい日々の裏面^{うら}にてではなかったのだ。

* * *

こういうのが 彼女がここで得た《慰め》だった、
眼に見えない手によって明瞭になるのだから⁽¹⁹⁾、
それを今や彼女は読んで、微笑みながら戴くのだ⁽²⁰⁾
《王冠》を、涙をぬぐい去って下さる彼^かの方と共に⁽²¹⁾。

「M・六三」

訳注

(1) チャールズ一世の次女で、一六三五年の「無辜聖嬰兒の
日」(Holy Innocent's Day)、即ち十二月二日生れ、父王
の処刑死(一六四九年一月三〇日)後、一六五〇年九月八
日、ワイト島のカリスブルック城で熱病により獄死した、

享年十五。その島のニューボートにある聖トマス教会に埋葬された。その墓には「E・S」とのみ記されていたが、一八五六年にヴィクトリア女王が、この悲運の姫に記念碑を建立した「Ma・二四一一」

- (2) *Virgin-tears* この少女は殊の他魅力に富む人柄で、その悠揚迫らぬ温厚な態度は、当時のどの証言でも讃えられており、父王の敵にも寛容を保って、彼らからも「節度姫」「*Temperance*」なる愛称を獲得した。父王処刑の前日に最後の面会を果たしたことは、英国史上最も痛ましい出来事の代表例に相違ない「Ma・二四一二」

- (3) *Genii of this shrine* 畏敬される場所には、見護る任務を担う守護精霊がいるという異教理論の反映。「アスク川に寄せて」「小考(二)3」の一八行目にも出てくる「同」／守護天使の概念にキリスト教化された「RA・五〇一」
- (4) ∴ *wing'd away* 冒頭からこのままで、以下のドレイトンと同じ文脈。「あなたは『天国』の不滅の店に押し入ったが／『貞節』『名譽』『機智』及び『美』が収まっていたからで／それを手に入れて逃れ去ったものの／以前と同じように自由なままである」(Drayton [Michael, 1563-1631] 'Idea, Sonnet 14') 「Ma・同」

- (5) *Casket* 宝石類を入れる小「手」箱。柩、棺を指す。小さなイメージで夭折者を表しただろう。尚、「匣」は「貴重品を収める小箱」(白川静「字通」)なので拙訳で使った。

- (6) *Thou hadst...for thee* 次のボーモントの一節と比較せよ、「悲嘆を感じ取れるやいなや／あなたには十分備えることが出来たが...／涙をその効用も知らないうちに流してしまった／あなたが長年月、悲しくても押えてきた涙を」(F. Beaumont, "An Elegie on...Lady Rutland") 「M・七一〇」

- (7) *Thou suck'st in woes* 「自家の窓から満月を眺めているエテシアへ」「続小考(三)31」の一〇行目「私は『悲しみ』を吸い込んでその『影響力』を得た」参照「Ma・同」

- (8) *Tears without noise...shrill as any bloud* 二行「自認」「小考(十二)27-29」の一行目「どのくらい疳高いのだろう 音もなく湧く涙は」とその訳注(1)参照「M・七一〇」

「創世記」4・10では、アベルの血は地面から泣き叫ぶと言われている「F・八八」

- (9) 国王の処刑への密かな言及「Ma・二四一二」

- (9) *headless = senseless, stupid* 「Ma・同」／= *brainless* (*OED* *headless* a 3) 「RA・五〇一」

- (10) *timid = matured by time* 「Ma・同」／(*OED* *timed ppl.a*) 「イサクの結婚」「小考(四)1-4」の六行目に同語出現「RA・同」

- (11) *as Rhumes the tendrest part 'Rhumes'の後に'tall on'*

が省略されていることが次行の 'fell on' の存在で判る。ハーバートの「告白」"Confession" [六行詩五連計三〇行の作品、W・L・四四二―四五] 一二行目「そして襲うのだ リューマチのように最も虚弱な部分を」及び「外国の諺」(Outlandish Proverbs 475)「健康はリューマチのようなもの、それは最も弱く部分を襲う」"Wealth is like rheum, it falls on the weakest parts." 参照 [R・A・同]

- (12) as *Balm-trees*...doe them read 樹液には医薬成分があるという事実からの伝統的な詩の概念、カートライトの次の一節と比較のこと。「そしてそのバルサムの木は持ちこたえるのだ／治療しなければならぬ人々の酷い〈傷〉を」(Cartwright, "On the Circumcision") [M・a・二四二―三]
- (13) gently spend 「虹」[小考(二) 52-53]の一一行目「雨はやさしく己が蜜の雫をかけて」[全く同じ句 (gently spend) を使用]を参照 [M・七二〇]

ハーバートの「摂理」"Providence" [四行詩三八連計一五二行の大作、W・L・四一五―二七]の一一七―一八行目「雨は、私の花々を傷つけず、優しく費すのだ／あなたの蜜の雫を」を参照 [M・七四九]

- (14) As envious Eyes...misfortunes by aspect 唯の一瞥で不運や死さえ引き起せる破壊をもたらす眼の所有者がいるという古い神話(長く存続した迷信で、プラトーン自身もこの考えを抱いていた)を使用 [M・a・二四三]

ヴォーンの時代には、人を見詰めることで「(大声を上げて) 損っている」として、魔女が時々告発された [R・A・五〇一]

- (15) aspect = a look; glance [M・a・同]
- (16) Influx = astral influence [R・A・同]
- (17) Eclipsed rays 天体の蝕は災難をもたらすというルネッサンス期に広く行われた占星術上の見解の反映 [M・a・二四三]
- (18) back-side 明る日々の裏側、暗い面。「振り返って」[続小考(一) 25-26]の一一五行目とその訳注(3) 参照 [F・八八]

この行以下何行かが明らかに削除されている [M・七一〇]／作者が罪に問われそうな政治上の言及を編集者が注意深く削った [M・a・同]

作者の憤激のほどと悲運の貴種少女への万斛の涙が、この削除部分によって一層鮮明になるだろう。

- (19) As by...reads この二行は、除去されたと思われる数行の光に照らせばもっと明瞭になるかも知れないが、「エゼキエル書」2・9―3・3「手が私に差し伸べられており…」に言及かも知れない [M・同]

- (20) and smiling wears...tears 文脈からみて次のヘリックの二行を思わせる、「神は我らの眼から涙を悉くその後拭き取り／己が〈子ら〉にそれから口付けを与える、鞭打ちで

はなへ」(Herrick, "Tears" I) [Ma・同]

- (21) him, who wipes off tears 「Eハネの黙示録」 7・17
「御座の前にいます子羊は彼らの牧者となり、生命の水の
泉へ導き」神は彼らの眼から涙を悉くぬぐい去られるから
である」参照。当時の書き物に頻出する [Ma・二四三]

この、削除部分の存在を顕に示す八音節詩行二行連句三
八行の作品を、感情の本当の深さと情緒の強さを如実に示
す詩だと評するマリラは、『火花散る燧石』の作者ならさ
もありなんと思わせられる芸術構造のあれこれの細部が、
この詩を詳細に検討すれば明らかにすると述べている
([Ma・二四一])。彼は、この詩の一五行目、「薔薇の
芽」のように」以降は、『燧石』所収の「或る幼児の埋葬」
〔小考(六) 35-36〕と全般に亘る類似がみられるとも指
摘している。作者自身が、自らの娘の一人を夭逝させたら
しい体験も重なっているとすれば、その想いの悲痛さは一
入身に滲みよう。訳注(1)(2)などから背景を知れば
知る程、尚更感銘深い詩である。

次に再び、同時代詩人への賞讃詩が続く。

ウィリアム・ダヴナント卿へ、彼の『トンディベ
ル』について

To Sir William Davenant, upon his Gondibert

さあ、我らは救われた！⁽²⁾ だからあなたの稀なる〈ペン〉
で〈詩人〉は生きてゆける、〈王族〉が家臣のように死ぬ時⁽³⁾
あなたはその見込みを明らかにしてくれた 我らの無害な
最近⁽⁵⁾は、在るものとされていた〈邪悪〉で曇っていた所だ
だったが、

それでそこに居る〈優しい〉若者の〈一組〉がなれるのだ⁽⁶⁾
〈星々〉が上空で親しく談笑し合う時のように純潔に。
あなたは教えたのだ 彼らの〈言葉遣い〉と彼らの愛情が

流れてゆくようにと

〈薔薇の花びら〉のように穏やかに、〈処女雪〉のように

冷たく、

それは二重に我らに御馳走してくれるのだ、甚だ洗練され

ていて、

心を喜ばせると共に気高くしてくれる、

何か〈泉〉の水のような〈音楽〉を聴いているみたいに

楽し気な流れが洗い立てると同時に歌うのだから。

それでこれまでは《英雄詩》は

《精靈》⁽⁸⁾、《驚異》、及び怖れから作られていて

《悉く》《憂鬱な》飛翔のせいだ、夜になると

どんより覆われた暗い《地域》のようにみえて

まるでその《詩人》がすっかり意気阻喪してしまったのに

《巨人たち》と《各々の魔力》だけが威を振るっているみ

たいだったのを、

あなたは如何なる偽装にも我慢ならない《眼》を備えた

《太陽》のように

それをここまで《追跡し》て来て、甚だ稀有な⁽¹⁰⁾

博學な《諸々の発見》でその場所を満したので我らには

あの有名な《壮大な展覧》⁽¹¹⁾にあなたが立ち勝つたと分り

あの《幻影》⁽¹²⁾は悉く足下に放り出されたのが見えるのだが

それこそ以前の世界の不思議を育んだものだった。

我らの祖先がしたように《パン屑》と《取り除くこと》に

努めるのは鈍感だったのだし、言われないでも

賢明にも食欲を抑えたのだから。これであなたの火は⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾

あなたの年を経た《祖先》の灰の中からぱつと燃え上って

世界に あの彼の視力より暗い彼らしい空想が

示すような《説得力豊かな》光を 与えたのだ。

また あなたに振りかかったのは 日々の障害と長さだけ

ではなくて（尤もこの両方は彼の名声に強さと高さを

与えたのだが、古くからの《不満》⁽¹⁹⁾だったものであり

その空想を台無しにする見棄てられた《監禁状態》⁽²⁰⁾だった。

どのようにして 孤りだけ石群の中に幽閉されたあなたが

バーサの微笑みを飾り立てられたのか？ あなたなら彼女

の呻き声さえそう出来たろうが。

そして奇妙なまでに《雄弁に》あなたの自我は分れるのか

《悲しい》不運と、《花盛りの》《花嫁》⁽²³⁾とに？

あなた自身の豊富な蓄えから紡がれて あの堂々たる

《冒險家たち》⁽²⁴⁾の間で一緒に歌われた あなたの充実した

《歌》の進行中に 我らにははっきり分るのだ⁽²⁶⁾

その《お陰だと思われている》才能は あなたの中で《生

来の》ものなのだ。

だから永遠に（しかも高い評価を得たまま）生きたまえ

あなた自らの鏡に映されて、比類なきゴンディベールに、⁽²⁷⁾

そして賢いバーサの中にあなたの愛は《安置された》まま

であって欲しい

彼女の《エメラルド》⁽²⁸⁾同様瑞々しく、彼女の心そのままに

美しく

誰もが（彼らはそうする筈だが）〈認める〉ことだろう

あなたは

〈詩人たち〉の　そして〈愛する人々〉の　〈王子〉でも
あると。

〔M・六四―六五〕

訳注

(1) ダヴナント（一六〇六―一六八）は自作の英雄叙事詩『コンデイベール』[ロンバルディとアリベール王の宮廷が場面の騎士物語]を第三巻の真中で終らせた。その時彼は、一六五〇年一〇月、イギリス海峡にあるワイト島のカウズ城（Cowes Castle, the Isle of Wight）に捕われの身で、議會派に対する罪の廉で処刑（されると彼は思っていた）を待っていた〔F・八九〕

この未完の詩は、一六五一年に二つの版で刊行されたが、少なくともそのうちの一つの版は一六五〇年に出ている（Douglas Bush, *English Literature in the Earlier Seventeenth Century*, 1945, p. 520.）。作品そのものの出版は三か月前の一六五〇年に出たダヴナントの『コンデイベール』論と、それへのホッブスの『答』（Davenant's *A Discourse upon Gondibert*, with Hobbes's *Answer to it*）には、共に、

ウォラー（Edmund Waller, 1606-87）とカウリー（Abraham Cowley, 1618-67）それぞれによる推賞詩の同じものが、「序」として付いている。H. F. B. Brett-Smith, "Vaughan and Davenant", *MLR*, x1 (1916), pp. 76-8 / E. L. Marilla, "Henry Vaughan to Sir William Davenant", *PQ* (1948), pp. 181-4 参照〔RA・五〇二〕

主にデカルトとホッブスによって文学環境に導入された新しい批評概念としての〈真実〉——現実を表現する手法としての「空想」fancyを退けて、「判断」judgementを唯一の依存すべき案内役にする——を標榜する、新しい現実主義、即ち合理主義で「英雄詩」を書こうとしたものが、『コンデイベール』で、トマス・ニューカム（Thomas Newcomb）による出版登録は一六五〇年十一月七日、ウォーンの『白鳥』はハンフリー・モウスリー（Humphrey Mosely）によって一六五一年四月二十八日に出版登録されている。ダヴナントの筋金入りの王党派の姿勢と、その受難を被ったことにウォーンは感動した〔Ma・二四四―四五〕

(2) Well, we are rescued 以下四行目までサックリングの「節と比較のこと」「君は我々を救ってくれたよ、ウイル、これで将来は／時代の罪にしないでくれるよ／純粋な機智の死をね…」(Sir John Suckling [1609-42], "To My Friend Will Dovenant")〔RA・五〇二〕

清教徒が厳格な道德上宗教上の理由で詩人・劇作家を攻

撃し、一六四二年には劇場を閉鎖したことが作者の念頭にある。冒頭四行の主旨、「我々詩人は君のペンによって時代の種々の申し合わせたような非難から救われたよ、君は詩が有益で時代が変って真の価値が承認され賞讃される時には栄える保証を与えてくれたのだから」[Ma・二四五]六四九年)への言及[同]

(4) *Hill* = *Mount Helicon* [同] / ダヴナントの「序」に「詩人たちの有名な山 (*hill*)」とある [RA・同]

ヘリコーンは、ギリシャ東部ボエオーティア地方にある標高一七五〇mの山、古代ギリシャ人は、アポローンとムーサイが住むと考えた。その山腹の泉から湧き出るとされる「詩の靈感・詩想の源泉」も。

(5) *Of late years...imputed* III 詩人・劇作家は「虚偽」を公にし、不道徳を促進するという清教徒からの糾弾に言及「序」の後半でダヴナントは、市民にとつての詩の価値を熱心に説く [RA・同]

(6) *And the Soft...smile above* 「人間の結婚も、その前に知り合って親交を結ぶようにならないうちは、他の生物が急いで相手を選ぶのと同様に粗野で備えないものだった。肉体ではなく心を知り合うことが必要だが、その心を最も自然に楽しく解明するのが詩である」[「序」六七] [RA・同] / 更に八行目辺りまでヴォーンは、この作品が不

道徳を推進するという清教徒の非難から詩を護るものだと主張する [Ma・二四六]

(7) *They both delight, and dignify the mind* 喜びと共に教訓を与えるというのが、ルネッサンス期を通じての詩の正当化であり、その最も有名な表明が、シドニー卿の『詩の擁護』(Sir Philip Sidney's *The Defence of Poesie* [1595]) [Ma・同]

(8) *And where before...Incantments sway'd* ダヴナントは「序」で、ホメーロスからスペンサーに到る従来の「英雄詩」詩人への批判から始めるが、それは「ルネッサンスの宗教性倫理性の強い想像力の火が、文学及び科学の面での批判に富む合理主義によってどれ程冷やされてきたかを示す」(フッシュの前掲書三五四—六)

ウォラーの讃辞、「さあ、君の比類なき書物に／：／それを膨らませるのは神々や怪物に関する大胆な物語ではなく／我らの所に棲みつような人間の情熱なのだ」、及び、カウリーの言、「思うに英雄詩は今まで／何か幻想の魔法の国のようにみえたもので／神々、諸悪魔、妖精たち、魔法たち及び巨人たちが競い合い／人間以外のあらゆるものが人間の最上の作品に蔓延った。／あなたは立派な騎士のように、神聖な武器を振るって／あの怪物たちをそこから追い出し／その魔力を終らせたのだ」参照 [RA・五〇二—三]

- (9) *the Melancholy flight* 以前の英雄詩の作者たちは、幻覚や奇矯な空想の飛翔を引起すと信じられていた憂鬱に、苦しんでいるに相違ないとの暗示 [R・A・五〇三]
- (10) *with Discoveries/So rare and learned* 「文系理系どの分野の知識人のお陰を被ることも遠慮しなかった」(「序」三四) [同]
- (11) *Grandeza's = magnificent displays* [F・八九] / = *exhibitions of grandeur* 以前の英雄詩の特徴だった誇張した、奇想天外な場面を蔑んでの言及 [M・a・二四六]
- (12) *Vizards = phantoms, spectres* 「幻影、幽霊」(*OED vizard sb* 4) [R・A・同]
- この文脈では次の関連した画義を含む一、*phantoms*、二、*false representations* 「偽せの描出」[M・a・同]
- (13) *'Twas dull to...wise appetite* 九行目の食事のイメージを引きずっている [同]
- ダヴナントの「急ぎの食料で国民(詩人の常連客で、君主として尊敬されることを求める)を持て成すのは甚だ烏澁がましい」(「序」三一)を念頭に置いたか [R・A・同]
- Loyders* 食後に食卓の屑を取り除いて入れる容器(*OED voider* 3)。ここを敷衍すれば、「我らの祖先が不適切な食事の席についてもっと賢明なものへの欲求を抑えるのは鈍感だったのだ、彼らはそれ以上に良い食事に招かれたことはなかったのだから(九行目にダヴナントが出した御馳走

- がその直接の適例)」[同]
- Crunts and Loyders* 「パン屑」と「取り除く[void]人、事」。これは一種の二詞一意で、「パン屑の除去」だろう。
- (14) *This = this want of better fare* 「このようにもっと良い食物がないこと」[M・a・同]
- (15) *fire = poetic fire* 詩の熱情 [同]
- (16) *This made thy fire...darker than his sight* 二つからのこの四行難解だが、*his sight* を *thy sight* に校訂すれば(ダヴナントは「見る」のに、彼の祖先は唯想像しただけだから)その難解さは一部緩和される。それにしても *thy aged Sire* 「あなたの年を経た(祖先)」が不定だ。可能な三人が挙げられてきた(いずれも完全には納得いかないが)
- 一、ホメーロス(前掲 *Bret-Smith*, 76-77)。二九行目は、ホメーロスが盲目になったことを指すと思われる。英雄詩の改革者としてのダヴナントは、ホメーロスの息子に譬えられており、彼の作品は『ゴンディベール』と較べれば、自身の視力より更に暗い(啓示性が劣る)ようにみえる、という意。
- 二、「ベン」ジョンソン。ダヴナントは彼から桂冠詩人を受け継いでいる。この場合の意味——ジョンソンの想像力による作品は、洞察力の価値という点ではダヴナントの書き物に劣る。

三、シェイクスピア〔C〕ii・三四一。「ダヴナント卿はシェイクスピアの単なる詩作上の子供以上だという考えは町では普通に行き渡っており、彼自身もまんざらでもないと思っていたようだ」(Spence, *Anecdotes*, 1820, p.82)。この場合は、ここは、シェイクスピアが「空想」の領域で為し遂げたことは、傑出した息子を生んだという実用上の業績ほど輝かしくはなかったという意。次を参照、「彼女の欲望がぱつと明らさまに燃え上って／この世に彼女の恥を見せる光を与えるに相違ないのでは？」(Randolph, *The Jealous Lovers*, II, ii, 28-29)〔M・七一〇—一〕

ダヴナントがその「序」でホメーロスに何度も言及しているところから、ホメーロスとみるのが説得力がある。ここはヴォーンが、ダヴナントをホメーロス（に関する伝承記録によれば、彼は長生きして盲目になった）より優れた英雄詩の詩人だと見做せたのだ、と受け取れない場合にのみ難解になる。彼の「序」からみて明白なのは、ダヴナントは自らそのような主張はしなかっただろうが、ホメーロスのよりは優れた原理に基づいて自分の英雄詩を書いているとは思っていた〔RA・五〇四〕／マリラも縷縷詳述の末にホメーロス説〔MA・二四七〕

- (17) Nor wast alone...Encounter'd thee じいの主旨は、ダヴナントの意匠は長らくに及ぶ意見の裁きで反対された、というもの (OED bar 22b 「公衆の見解の…裁き」)〔R

A・五〇四

- (18) bars and length of dayes 日々の長さ、によって引き起される「に伴う」障害 'bars and length'は「長い障害」、二詞一意。この獄中体験が彼の名声を強く高めた。

- (19) an old Complaint 「例のよくある話」と口語で使われるように、投獄はありふれた話（国内の激変の日々には）〔RA・同〕

- (20) a forlorn Restraint ダヴナントは死刑を覚悟しながら獄中で『コンディベール』を未完のうちに終らせようとした。ここまでの四行の意。あなたはホメーロスが抜群だという長年周知の見解によるばかりか、想像力を枯渇させる投獄によっても妨害された〔RA・同〕

- (21) BIRTHA 『コンディベール』のヒロイン〔Ma・同〕〔RA・同〕

- (22) Dresse = suitably portray 「適切に描写する」〔Ma・同〕

- (23) a Blooming Bride バースを指す、作中の句を使用、「あなたは多分誇らし気に、花盛りの花嫁を／寺院に導いてゆくだろうが、そこで私は衰弱している」〔Ma・二四八〕

- (24) Those fair Adventurers この作中の恋する人たち〔同〕

- (25) tenour = progress ; course 〔同〕

- (26) we plainly see...are in thee 即ち、彼らのせいで得たとされる美德は、明らかにあなたに生来のものだ〔Ma・

同]

- (27) In thy own mirror...Goubert この詩とその主人公は、
ダヴナント自身の長所を反映していると思って「R・A・五
〇四」]

- (28) Enruidl ゴンディベール公爵が花嫁として選んだ身分
の低いバーサに与える「結婚の宝石」[「M・a・同」]

「身につけていて蔑ろにされた妻となったら／不在の主
人がいつ不実を働いたかを／氣を失い生命が弱々しく衰え
てゆくことで示してくれる陽気なエメラルド」(Goubert
III, iv, 45-52) [「R・A・同」]

先輩詩人への賞讃詩、十音節詩行二行連句四八行の作品。
これまでこう述べてきた詩型は、弱強五歩格(十音節)の
詩行が二行ずつ対で押韻してゆく「英雄対連」(heroic con-
dite)と称されるもので、ヴォーンの時代は特に愛用され
た。『白鳥』や『タレイアー』所収の作品にはこれまで見
てきたように、この詩型が多い。

本稿で取り上げた七篇で、『白鳥』に収録されているヴ
ォーンの英語の自作詩は全て拙訳が終った。それらは、ヴ
ォーン自身を育んだ故郷の川への讃歌「アスク川に寄せ
て」と、その河畔で親友との旧交を温め直そうという「彼

の引退した友人へ、ブレックノックへの招待」[共に小考
(一)]、国の現状を正しい流れに戻そうと警鐘を鳴らす
「死体安置所」、当時の社会及び作者自身も日頃抱いている
或る思いを形象化した「高利貸の友に」、偶然の出逢いに
感慨を催した「彼の友人——へ」、奇抜な寓喩詩「J・リ
ズリー氏によって彼に貸与された外套について」[以上続
小考(五)]、作品読後の感動を表明した「ゴンボー氏」[続
小考(三)]、友人の戦死を悲嘆する「一六四五年、チエス
ター近くのラウトン・ヒースでの最近の不幸な紛争で殺さ
れたR・W氏の死を悼む哀歌」[続小考(四)]、共に真価を
認め合った文学上の友人に贈った「最善にして最大の洗練
された夫妻へ」と「見事な洗練の極みK・フィリップ夫人
に」[続小考(三)]、以上の十篇と本稿の七篇の合計十七篇
である。その殆どは、他者への賞讃と追悼の詩作品であつ
た。それらに托された作者自身の屈折した「想い」が、鬱
鬱と表明されていて読者の胸に滲みる。ラテン語の詩は、
次回に扱うことにする。

*参考文献

本誌『成城文藝』第二一一号(二〇一〇年六月)の拙稿末

尾（二四—三〇ページ）を参照されたい。ここには本稿での直接参考文献のみを挙げる。尚、本稿中、「小考（一）」、「小考（十三）」は、本誌既連載の拙稿（第一九九号「二〇〇七年六月」〜第二二一号）を指す。

〔続小考（一）〕「補遺と増幅——ヘンリー・ヴォーン、火花散る燧石」以後の「成城文藝」第二二五号、19—47、二〇一一年六月。

〔続小考（二）〕「思いは弱まることなく——ヘンリー・ヴォーン『甦ったタレイアー』の世界」『同』第二二六号、29—56、二〇一一年九月。

〔続小考（三）〕「対話精神の探求——ヘンリー・ヴォーン、呼応—初期と後期と」『同』第二二七号、1—36、二〇一一年十二月。

〔続小考（四）〕「愛」の詩による出発——ヘンリー・ヴォーン、国情を冷厳に凝視する」『同』第二二九号、1—48、二〇一二年六月。

〔続小考（五）〕「優雅にのみは啼けない——アスクの白鳥ヘンリー・ヴォーン」『同』第二二〇号、1—24、二〇一二年九月。

『詩集』『詩集、ユウェナーリスの諷刺第十歌の英訳付載』*Poems, with The tenth Satyre of Iuvenal Englished* (1646)
『燧石』『火花散る燧石』*Silex Scintillans* (1650, 1655)
『白鳥』『アスクの白鳥』*Olor Iscannus. A Collection of Some Select Poems, and Translations* (1651)
『タレイアー』『甦ったタレイアー』*Thalia Rediviva* (1678)

〔C〕Chambers, E. K., ed. *The Poems of Henry Vaughan, Silurist*. Introduction by H. C. Beeching. 2vols. London and New York: Charles Scribner's & Sons, 1896.

〔F〕Fogle, French, ed. *The Complete Poetry of Henry Vaughan*. New York: Doubleday. 1964; New York University Press, 1965.

〔H〕Hutchinson, F. E. *Henry Vaughan: A Life and Interpretation*. Oxford: Clarendon Press, 1947.

〔H・S〕Healy, Thomas and Jonathan Sawday, eds. *Literature and the English Civil War*. Cambridge: Cambridge University Press, 1990.

〔L〕Leishman, J. B. *The Metaphysical Poets: Donne, Her-*

bert, *Vaughan, Traherne*. Oxford: Clarendon Press, 1934.

[JH] Lyte, H. F., ed. *The Sacred Poems And Private Ejaculations of Henry Vaughan*. Boston: Little, Brown and Company, 1854.

[M] Martin, L. C., ed. *The Works of Henry Vaughan*. Oxford: Clarendon Press, 2nd ed. 1957. 本稿の底本。

[Mæ] Marilla, E. L. *The Secular Poems of Henry Vaughan*. Uppsala, Harvard and Copenhagen, 1958.

[PA] Rudrum, Alan, ed. *Henry Vaughan: The Complete Poems*. New Haven and London: Yale University Press, 1976.

[T-] Tuttle, Imilda. *Concordance to Vaughan's SILEX SCINTILLANS*. University Park and London: The Pennsylvania State University Press, 1969.

[M-J] Wilcox, Helen, ed. *The English Poems of George Herbert*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007.

[OCD] *Oxford Classical Dictionary*, 1949, reprinted 1968.

[OED] *Oxford English Dictionary*

尚、一連の拙訳での〈〉付きは、原詩では大文字で始められる語句、コチック体は同じくイタリック体の部分である。原詩での固有名詞は全て大文字で始まるイタリック体なので拙訳ではカッコ無しの普通の字体のままにする。

訳注のうち、出所表示(例えば「Ma・二一五」)のないもの、及び訳注の中の「」部分は本稿筆者による。